

# 日常異変 コロナの私(16)

## コロナ禍を越えて開館した「トキワ荘マンガミュージアム」

### 4か月遅れの開所式

東京・豊島区南長崎の公園の一角に、2020年07月、「トキワ荘マンガミュージアム」が開館した。今年3月の開館予定が、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のために延期されたが、事前予約制によって入館者数を管理するなど、苦心のコロナ対策の末、オープンにこぎつけた。見学予約者のリストは1万人を超え、この1か月で、8千人以上がマスク姿でミュージアムを訪れている。

トキワ荘マンガミュージアム; <https://tokiwasomm.jp/about/>



## 「マンガ」の起点になったトキワ荘

「トキワ荘」は、旧椎名町にあった木造二階建の質素なアパートであった。1953年、手塚治虫さんがこの二階を仕事場としたことをきっかけに、寺田ヒロオ、藤子不二雄、石森章太郎、赤塚不二夫……数多くの漫画家が集まって、競い、また支え合いながら優れた作品を次々と発表、いまや世界が認める「マンガ」の起点となったところだ。

老朽化のため1982年に取り壊されたが、「マンガやアニメ文化を次世代に継承し発信する拠点」にしようと、高野之夫・豊島区長をはじめ地域住民の地道な活動で、4億2千万円の建設・事業資金を集め、寸法、材質など元の形状のままに復元された。

漫画家らが住み込みで作品を描いた4畳半の仕事場も、座り机や作画途上の原稿など、日常の光景が再現されているほか、一階には、関連作品などの資料が展示されている。

一番の目玉となる展示品は、手塚治虫さんが「リボンの騎士」のサファイヤ姫を手書きした「トキワ荘の天井板」で、このミュージアムで唯一、旧トキワ荘由来の資料だという。これは警視庁5方面記者クラブから同区に寄贈されたもので、筆者は当時この記者クラブにいて、日夜サツ回り記者として活動していた。当時のいきさつをお話したい。

警視庁は管内を「方面」というブロックに分け、拠点となる警察署(丸の内署、新宿署など)には記者クラブが設置されている。警視庁記者会に所属する大手メディアは、それぞれの方面記者クラブに、社会部の新入り記者を一人ずつ配置、事件事故、社会の話題を取材させてきた。

1982年当時、池袋警察署内にある「五方面記者クラブ」は、文京、豊島、板橋、練馬、北区内の14警察署を担当し、私たち7～8人の「サツ回り記者」がいて、競い合い、また助け合いながら、午前10時から午後10時までの“責任取材時間”を過ごしていた。

## ラーメン屋からトキワ荘解体現場へ

管内には、火事、事故、ひったくりなど小さな事件が多数、発生することから、「ゴミの五方面」と呼ばれていた。「三越ニセ秘宝展事件」、「岡田社長逮捕」などが続いたこの秋、11月30日午後1時、夕刊への事件記事出稿を終えた記者たちは、池袋署から連れ立って、トキワ荘近くのラーメン店まで昼食にでかけた。

藤子不二雄さんの「まんが道」や、赤塚不二夫さんの描く「小池さん」が美味しそうに食べる、あの「ラーメン」を賞味しようというのだった。

醤油・さっぱり味の古典的な東京ラーメンを味わったあと、ついでに近所のトキワ荘をのぞきに行ったところ、この日から解体工事が始まり、窓枠や電線の取り外しが進んで

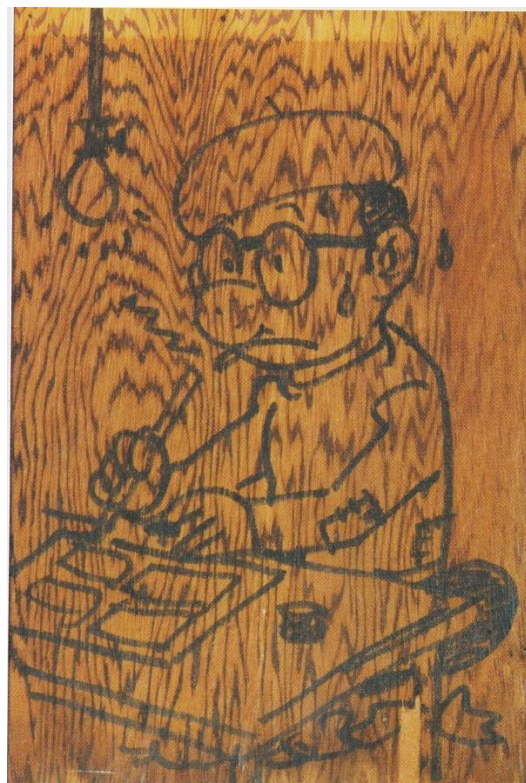
いた。一同は、さっそく取材に着手し、「トキワ荘解体」の報道は、翌朝の各紙社会面トップに掲載された。

解体に関して談話取材を受けた手塚治虫さんは、記者たちに「ぼくは明日、天井板をもらいに行きます」と、打ち明けた。そこで私たちサツ回り記者も、トキワ荘で落ち合うことにして、12月01日夜、真っ暗なトキワ荘の玄関で、一人でやってきた背広姿の手塚さんにお目にかかった。

私たちはヘッドランプなどの照明を持参したが、手塚さんは暗い中をまっすぐに二階の元自室(14号室)に入り、ここの天井板をと、我々に所望された。記者たちが作業用の脚立を使って天井板を何枚かはがし、手塚さんはこれを手に至極満足そうだった。はがした一枚を差し出して、「手塚さん、記者クラブのためになにか描いていただけませんか？」とお願いすると、手塚さんは渡された黒い太字のフェルトペンで、私たちが支えている板の上に、さらさらと「サファイヤ姫」を描いた。

「リボンの騎士はこの部屋で書いた作品だからね」

そして、長い天井板の下半分が空いているのを見ると、「ここに僕も描こう」と言って、裸電球の下で机に向かい、コマ割りを書く自画像も描いてくれた。



「五方面記者クラブのみなさんへ」と書いてほしいとお願いすると、「五方面って、なんですか？」と質問。私たちが、各社の社会部1年生記者が集まって、特ダネを抜き

合ったり、一緒に討論したりする記者室ですと答えると、「ああ、それじゃあ、トキワ荘の  
ようなところなんですね」と、合点がいった様子で書き足してくれた。



いま思えば、夢のような時間でもあったが、手塚さんの描くフェルトペンの「キュッ、キ  
ュッ」という感触と匂いは、鮮明に残っている。かくして、リボンの騎士の天井板は、五  
方面記者クラブのお宝となった。

### 天井板には生きてきた息遣いがしみ込んでいる

なぜ天井板にこだわるのか、手塚さんは話してくれた。

「窓際に座り机を置いて仕事をし、右の壁際の床に電熱コンロを置いて、自炊してい  
ました。だから、この上の天井板には、焼いた魚や煮炊きした煙、当時のぼくの生活が  
染み付いているんです」

そして、コンロを置いた前にある柱の表面を指差して、「ここをよく見てください。制作  
がうまく行かないときや、編集者と喧嘩をした後なんかに、<クソッ、クソッ>と言って、  
小刀で切りつけた跡があるんですよ……」。

マンガの新しい表現の試みに取り組んでいた手塚さんだが、出版社との衝突もあり、  
一方では、石森章太郎さんら斬新な才能の若手も台頭、こうした中で、苦悩しながら描  
いていたことが本人の口からさらりと表現され、改めて“等身大の天才”を感じるこ  
うなことができた。



往時を語る手塚さん(上)と再現された共同台所(下)



長くても1年で、次々と記者が交代して行く方面記者クラブだったが、後輩たちがガラスのケースに入れて表装してくれ、2009年の「手塚治虫展」(江戸東京博物館)にも、出展されたことがある。

当時のサツ回り記者たちも、今は大半が退社、天井板の行く末が気になっていたときに、後輩の五方面担当記者たちから、新設されるミュージアムに「天井板」を寄贈してほしいと、豊島区から依頼があったことが知らされた。昨年春のことだ。「記者クラブ」といっても、だれに所有権があるわけでもない。手塚さんから天井板を託された我々も、良い落ち着き先が見つかって、正直、ホッとした。



天井板前で高野豊島区長(前列左から2人目)と往時のサツ回り記者

### 大英博物館でも存在感を出していた「Manga」

昨夏、滞在していたロンドンの大英博物館では、「マンガ展(The Citi Exhibition Manga)」が連日満員の盛況だったが、日本のマンガ文化の起点には、やはり「God of Manga」として手塚作品が置かれていた。

COVID-19のおかげで、レクや会議のたぐいが中止、延期となったこの春、久しぶりに自宅の書棚に並んでいる「火の鳥」を、手にとった。

日本史の曙の時代から、数千年先の将来社会、あるいはミクロの世界から宇宙の果てまで、時空を自在に飛び越える気宇壮大なドラマ、それを繰り出す創造力、宇宙創生、生命への真摯なまなざしとヒューマニズム、そして斬新なコマ割り、画像表現など、

圧倒されるばかりの作品で、感動を新たにした。

手塚さんはおだやかで、品の良い語り口。若い記者たちの依頼にも笑顔で応えてくれる気さくな人柄だった。ミュージアムの中央に展示されている「天井板」は、天才のそんな側面をいまに伝える、貴重な記念碑となっている。

小出重幸